寛政元年二月の、多紀藍渓が躋寿館以外に医官のための医学校の建設を希望している記事は、躋寿館の官医出席者の少なさを暗示する一資料。寛政三年二月の、今大路、竹田、吉田、半井の四家が独自に医学校開設を計画したが、半井氏が独力開設を主張したため計画が頓挫したという記事は、更なる検証を要するが従来未知の貴重な資料。寛政元年六月の躋寿館における賭博発覚の記事からは、大田錦城、吉田篁墩といった考証学、校勘学の先駆者の人となりの一端が窺えるのみならず、彼等を講師として許容した多紀氏の学問上の嗜好が知られる。

○第三報「幕末考証学の位相」

幕末に考証学が成立する背景は次の二点。物理的条件としては、小学（文字・音韻）に高い達成を示した清朝考証学（十八世紀中葉から一九世紀前半に極盛）の書物、および校勘資料（古文献、日本にのみ伝存したものが多い）が入手できる社会的・経済的・地理的環境。二つには思想史的背景として、寛政異学の禁を契機に治者と被治者の学問上の乖離が促進され、朱子学は武士一般や儒者、考証学は「道」に与らぬ階層中の富裕者によって分担されたこと。以上のことから、考証学は幕末期、清朝考証学の影響下に、日本独自の資料を駆使して、江戸在住の富商や医者などが主な担い手となって花開いたのである。

（平成十二年三月例会）

＊＊＊紹　介＊＊＊

二宮　陸雄　著

『桑田立斎先生』

一〇万人の人々に牛痘接種をおこなおうとの悲願を自らに課して、遠く蝦夷地にわたってアイヌに牛痘をほどこした桑田立斎の事績はひろく知られている。しかしその生涯については参照すべき伝記を欠いているので、それを知ることは容易ではなかった。

エドワード・ジェンナーの牛痘接種法発明から二百年の記念すべき一九九八年に本書が上梓されたのは、おおいに意義のあることであった。立斎自筆の『立斎年表』を基にして、その生涯、とくに安政四年に蝦夷地においておこなった牛痘接種の苦闘を克明に描いている。

桑田立斎の伝記は立斎一族の後裔にあたる日本史家桑田忠親氏が、一九八二年に『或る蘭方医の生涯』（中央公論社）として出版している。この折にも桑田氏が基本的に準拠したのは『桑田立斎年表』であるが、折角歴史家が執筆し一級資料を参考にしながらも、出版の目的が「専門の医学者の研究に寄与するような大それたものではもちろんなく、一般の歴史や文学の愛好者に立斎の人物を広く知って頂くため」との観点であったので、各所にフィクションを織り交ぜて史伝と読物も加味したものになってしまった。それだけに通読しやすいと

いう利点はあるものの、本格的な伝記という点からは物足りないものを感じていた。

そこへ現れたのが本書である。その意味で著者二宮氏もいうように桑田立斎伝としてははじめての著作であるといえよう。本書は五部からなっている。「第一部　医学に志す」では、故郷の越後国新発田から江戸にでて医学を学び、桑田玄真の養子となって万年橋のほとりで開業するまでを描いている。「第二部　天然痘に挑む」では、人痘接種法を身につけて天然痘の予防を考えていた立斎を描き、ジェンナーの牛痘接種法のわが国への移入過程を克明におっている。「第三部　ジェンナー種痘を広める」では、江戸における牛痘接種活動を描き、これが蝦夷地での天然痘撲滅活動へとつながって「第四部　アイヌの惨禍を救う」となる。「第五部　丹心千古を照らす」では、江戸にかえってさらに種痘事業に邁進している立斎の姿を描く。本書の圧巻はなんといっても安政四年五月晦日（三〇日）――『立斎年表』には閏五月とあるが五月が正しいと著者はいう――に江戸をたってから、一一月四日に帰府するまでの約五ヶ月に及ぶ蝦夷地での牛痘接種活動であろう。

著者は牛痘接種法については並々ならぬ関心を抱いている。さきに『種痘医北条諒斎・天然痘に挑む』（白河出版社）を出版して、牛痘法が伝播・普及する有様を克明に描くことに成功したが、その延長線にある桑田立斎の生涯と牛痘接種への飽くなき執念を描ききっている。

『立斎年表』については、さきに著者によって『日本医史学雑誌』（四五巻一号、一九九九年）に資料として翻字されたので、会員諸子はすでに目をとおされたことと思う。原本の書誌学的な記述を欠いているのは残念であるが、学会誌に印刷された『立斎年表』はわずか一四ページにみたない小冊子であるものの、その情報量たるや驚くほど豊富である。とくに蝦夷地でのアイヌへの牛痘接種については、その情熱をかたむけて立ち向かっている姿が手にとるように描かれている。

著者は医学の先人の業績を顕彰するためには労をいとわない人である。本書の執筆と平行して、桑田立斎を顕彰するために東京・江東区清澄の旧宅と種痘所跡に記念碑を建立し、北海道・標津町に顕彰碑を建立した。これについては二宮氏自身の筆で学会誌に報告されているので、これまたすでにご承知のところであろう。さらには本書の制作やデザインも担当して、その多才振りを発揮していることもつけ加えておこう。

桑田立斎というと牛痘接種法での業績が喧伝されることがおおいが、もう一つの領域である小児科医としての業績にも言及しているのは、均衡をたもった執筆態度といえよう。牛乳の利用をつよくすすめるなどオランダ医学に立脚した視点がみとめられる斬新な著書『愛育茶譚』の板行と、今日でいう乳児院にも比すべき「済幼院」の設立を意図したという業績をきっちりおさえている。

この『桑田立斎先生』をはじめ顕彰碑の建立などは、著者

の人並みはずれた行動力の果実であろうと、それに欠けるわたくしは羨望の眼差をもって見上げるものであるが、本書においても文献からの引用にさいして、『種痘医北条諒斎・天然痘に挑む』で指摘したことが繰り返されているのは残念である。『立斎年表』は本文において詳細に引用しているからいいではないか、という著者の声がきこえてきそうであるが、出来れば本書の末尾にでも全文を収録していただければさらによかったのでないかとも思っている。本学会員以外の読者は、著者の目をとおしてではなく、各自の立場で『年表』を読み解く楽しみが味わえたのではないかと思うからである。

さらに些細なことかもしれないが、一、二気のついたことをあげておこう。わたくしはお玉ヶ池種痘所の設立と運営について、かねてから考察をくわえてきた。その結果はその都度、学会誌に発表してきたところであるが、川路聖謨を設立仲間に引入れた功労者は著者のいうごとく伊東玄朴ではなく、箕作院甫であろうと思っている。また設立資金を拠出した蘭方医は八二名ではなく、八三名であること、そしてなぜ一名――それは戸塚静甫である――がこの名簿から脱落してしまったかをふくめてすでに発表ずみであることをつけ加えておく。歴史の解釈はそれぞれの著者によって差異があるのは世の常であるが、事実については恣意的な取扱いは許されるべきではないと思っている。

ともあれ本書が、今後の桑田立斎研究にあたって常に座右において参考にしなければならない書物であり、立斎の周辺にみられた牛痘法の普及・発展の状況についても、本書によっておおくの知識をあたえられることは間違ない。

（深瀬　泰旦）

〔桑田立斎先生顕彰会　東京都千代田区鍛冶町一―九―一、二宮内科　電話〇三―三二五四―五〇〇七、一九九八年一二月一九日発行、A5判、三八一頁、特別価格五五九〇円、一般一五〇〇〇円〕

石田　純郎　著
『アジア医科学史散歩』

アジア各国の医療事情やその国の近代医学の受容についての断片的な報告は数多くあるが、医科学史の視点からのまとまった史跡調査はあまり目にしない。

この地域はかつての欧米の植民地であったために、その影響を抜け出し自力で国有文化の自己実現を果たしたのは二十世紀半ばを過ぎてからであり、目下その努力が続けられているのが現状である。

著者は自らの足で、韓国、台湾、香港、マカオ、カンボジア、タイ、マレーシア、ミャンマー、インドの各地に、その国々の伝統医学の現状と遺物の探訪、近代西洋医学受容の史跡と資料を求め精力的な現地調査をくり返した体験をまとめあげた。

三年前に公刊した『ヨーロッパ医科学史散歩』は渡欧する